



# 技術を伝承する場所と 仕組みを作り、毛織物産地を守る

西川毛織株式会社 西川 隆造 社長  
株式会社 イチテキ 西川 知宏 社長

## はじめに

人口減少を前提としたまちづくり「地方創生」に各自治体が取り組んでいる。あるところは歴史的に受け継がれた地域資源を活かし、あるところは専門家を招へいし、斬新なアイデアを押し出すなど、この「正解のない課題」への対応に試行錯誤が続いている。

このような中、地域の活性化を目指した取り組みに果敢に挑戦している民間企業がある。本シリーズでは、そういった取り組みにスポットをあて、「正解のない課題」の解決に向けた糸口を紹介していきたい。

第1回は、毛織物産地における技術の伝承のため、「場所づくり」と「仕組みづくり」に挑戦している織物会社の取り組みである。

## ① 尾州産地の課題

愛知県一宮市、稲沢市、津島市、江南市、名古屋市及び岐阜県羽島市を中心としたわが国最大の毛織物産地である尾州産地。織物ができるまでの多くの工程それぞれに高い技術が発揮され、蓄積され、伝承されて、一つ一つの製品を生み出してきた。そうした「強み」により、現在でも、同産地における毛織物の生産量は、国内の約8割を占めている<sup>(注1)</sup>。

しかしながら、高い技術を有する職

人の高齢化や後継者不足などにより、これまで産地の「強み」として発揮されてきた技術が後世に伝承されないという深刻な課題が顕在化している。

こうした産地が直面している課題に真正面から取り組み、これを乗り越えようと果敢に挑戦しているのが、西川毛織株式会社（以下、西川毛織）である。

## ② 西川毛織株式会社 稲沢工場

産地内では織物会社（親機（おや

ばた）企業）が中心となって、企業グループが形成されている。西川毛織も同社を中心とした企業グループを形成している。

西川毛織が前述した「深刻な課題」に直面したのは数年前。「グループ内の整経業者が減少して、同工程がスムーズに流れなくなった」と西川隆造社長（以下、隆造社長）は振り返る。

「整経」とは、経糸（たていと）を整える工程のこと。織物は、経糸と緯糸（よこいと）を垂直に組み合わせて生地を仕上げていくが、経糸の長さや幅、配色などをあらかじめ調整してお



西川毛織 稲沢工場



稲沢工場内の整経機

かないと、美しく織り上げることができない。また、天然素材である羊毛の性質や強度などは一定ではない。「温度や湿度に敏感に反応する上、種類や育った場所(牧場)によっても細かな違いがある」(隆造社長)そうで、経験や感覚に基づいて微妙な調整を加える技術が必要である。つまり、整経は、生地を織る工程の中でも極めて重要な工程であり、高い技術が要求される。

「自グループ内の整経工程がスムーズに流れなくなった」という課題を解消するのであれば、他グループの整経業者に協力を依頼することも考えられる。しかし、それでは、「工程の衰退が技術の衰退につながり、やがて産地全体の衰退にもつながっていく」(隆造社長)ことが懸念される。

西川毛織の取り組みにおいて特筆すべき点は、「深刻な課題」に踏み込むとともに、根本的な解決を目指したことであろう。産地全体の衰退を回

避するために、産地を支えている技術を伝承するための「場所」と「仕組み」を自ら作ったのである。

まずは、稲沢市に購入した用地に新工場を建設し、ここに大型の整経機を2台導入した。さらに、この「場所」で技術を伝承するために、整経の経験者と未経験者の2名を同時に採用した。経験者と未経験者がペアを組み、様々な仕事を覚えることにより、技術を伝承する「仕組み」を作ったのである。

隆造社長は、「羊毛の性質などは、毎日の天候によっても左右される。そのため、整経に関する技術を取得するには、とにかく『どれだけ経験を積むか』にかかっている。独り立ちには10年は必要」と語る。それでも、「ベテラン技術者と若者に来てもらうことができたのは幸運だった。これだけ若い整経の技術者は他にはいないと思う。経験を積んで、今度は別の、次の世代へと技術を伝承してもらえよう

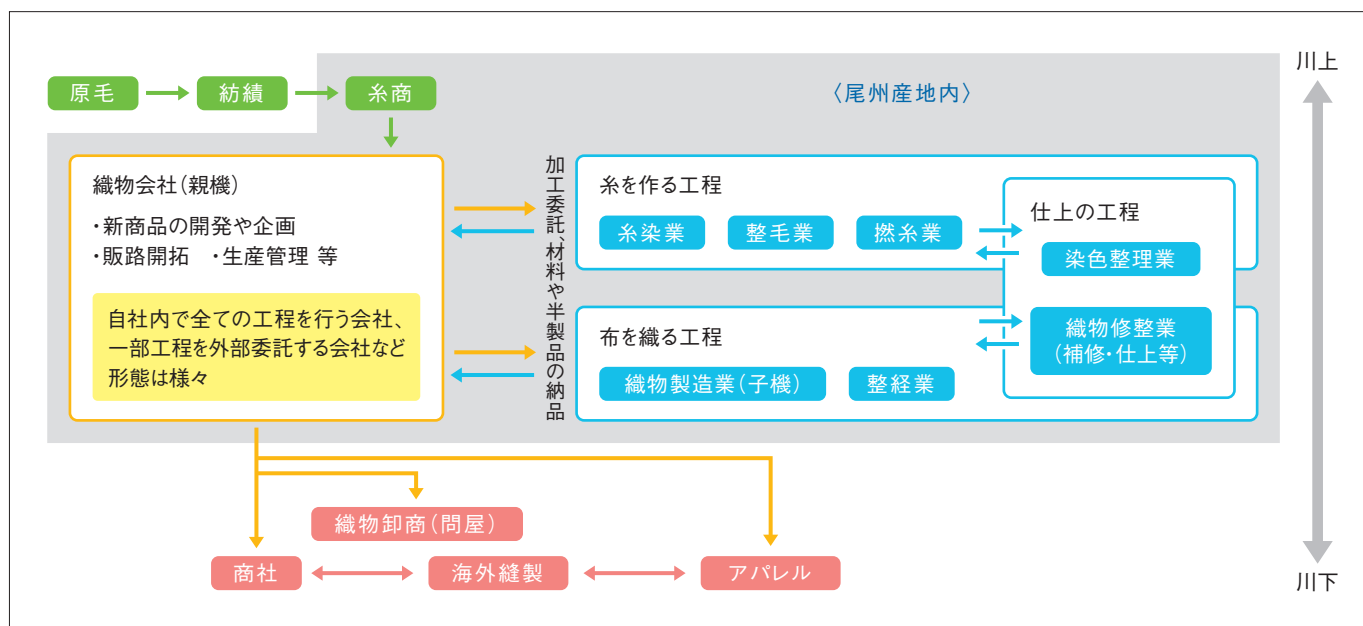


西川毛織株式会社  
西川 隆造 社長

になってほしい」と、技術を学ぶ若者に整経の将来を託す。

隆造社長の構想には、「次」もあるようだ。実は、新築した稲沢工場の敷地内には、すでに別棟が建てられている。隆造社長は将来、この別棟について機(はた)を織るスペースとして活用するつもりである。「機を織るといいう工程にも、いずれ後継者不足と設備の老朽化の波が来る。その時に対応するために、あらかじめ準備をしている」という。

図表 尾州産地の機能



出所:「全国繊維産地概況」(中小企業基盤整備機構)よりOKB総研にて加工



整経工程のために自社工場を新設し、将来を見据えて織物ができる「場所」も作った。さらに、整経の経験者と熱意のある若者を採用し、技術を伝承する「仕組み」も作った。当然のことではあるが、これらの取り組みには相当なコストがかかる。

「正直言って、建物の減価償却費だけみても採算は合わない」（隆造社長）。

しかし、そうした状況にあっても、あえて挑戦を続ける背景には、「尾州産地を守っていかなければならない」（隆造社長）という熱い思いがある。

「毛織物を製造する様々な機能がこれだけ集積している産地は、日本中探してもどこにもない」とする隆造社長の挑戦は続く。

### ③ 株式会社イチテキ 織物工場

隆造社長の構想を共有し、いち早く行動に移していたのは、西川毛織のグループ会社、株式会社イチテキ（以下、イチテキ）の西川知宏社長（以下、知宏社長）であった。知宏社

長は、隆造社長の従弟にあたる。

知宏社長もまた、機を織る工程の先細りに懸念を持ち、思い切った手を打った。

2016年3月、機を織る工程を委託していた織物工場を買収したのである。それは、まさに“機屋さん”と呼ぶにふさわしい、織機が出す力強くてリズムカルな音が聞こえてくるような工場であった。

知宏社長はこの織物工場について、「高い技術力を有し、小ロット・多品種の製品を短期間で織ってもらうなど、当社の要望に柔軟に対応してもらっていた」ことから、信頼の厚い委託先であったと語る。

しかしながら、この工場を営んでいたご夫婦は、自身が高齢になってきたこと、後継者がいなかったこともあって、「これから先、あと何年できるのだろう」という漠然とした不安を持っていたという。そのような時に、知宏社長から「次の世代を作っていくため、協力して一緒にやりませんか」と話を持ちかけられ、話はスムーズに進んだ。

後継者がいない織物工場は、やがてその技術と設備を失ってしまう。そ



株式会社イチテキ  
西川 知宏 社長

れは、とりもなおさず産地としての損失になる。こうした事態を避けるため、織物工場を自社工場として引き継いだ。

「今まですべて外注に委託してきたが、やっと“メーカー”としてスタートラインに立てることができ嬉しかった」と知宏社長は振り返る。

さらに、イチテキは織物工場を活用して、技術を伝承する「仕組み」を作った。新たに技術者を採用し、織物工場を経営していた方から技術指導が受けられる機会を作ったのである。

新たな技術者の募集方法は、就職情報誌に工場の風景と業務内容を掲載しただけだった。ところが、「若干名の募集のところ60名ほどが応募



糸の調整をする技術者（西川毛織 稲沢工場）



糸を巻き取る技術者（西川毛織 稲沢工場）

してきた」そうだ。「繊維業界に入ってものを作りたいと考えている人が多かったということが心強かった。多くの若い技術者が入ってくれば、尾州産地が再び活性化すると期待が膨らんだ」という。

「まずは2名を採用してスタートした」(知宏社長)取り組みは、まだ始まったばかりではあるが、「今後は別の人や、さらに次世代に技術を伝える循環が生まれることを願っている」と語り、若い技術者たちに尾州産地の将来を託す。

これらの取り組みは、想定外の「効果」も生んだ。自社の工程の一つとなった織物工場を見た社員の意識に、ものづくりへの興味が芽生えたのである。そうした社員からは、「自分も工場技術者で技術を習い、機を織りたい」という声が出てくるなど、社内の雰囲気が変わってきたそうだ。この工場で織られた生地がある高級ブランド名で販売され、それが完売したということも社員の自信につながっている。

「ものを作る喜びの中から、仕事のやりがいを見つけてくれるようになった」と知宏社長は想定外の効果を喜ぶ。

一方で知宏社長は、「尾州産地自体も変わっていかねばならない」という。「これまでは、個々の企業が独自に開発して製造・販売をしていたが、そういった体制は限界が来つつあると思う。これからは企業の枠を超えて、弱みを補い合っていくことも大事になってくる」と語る。

知宏社長は、「最近では、同じ展示会に出品して、情報交換をするなどの流れができつつある。この流れが広がっていけば、尾州産地はこれからも維持できるのではないか」との思いも持っている。

また、「尾州産地にはまだ機を織っている方たちがいる。そういう方たちから学べる機会があるということが産地のメリットである。その方たちの技術や知識をいかに守り、後世に伝えていくかが大切なことだ」と語る。

#### ④産地を守ろうとする 思い

西川隆造社長、西川知宏社長が揃って口にするのは、「毛織物製造の様々な機能がこれだけ集積している

産地は、日本中探してもどこにもない」(隆造社長)、「尾州に勝る毛織物産地はない」(知宏社長)という産地への熱い思いと、「産地を守るために何らかの手を打たなければ、ものを作らなくても作れなくなるのではないか」という強い危機感である。熱い思いと強い危機感を原動力として、様々な取り組みを進める発想力と行動力は、地方創生という正解のない課題に立ち向かう上で、極めて重要なヒントを示唆している。

これまで見てきたように、今なお国内一を誇る尾州産地では、産地を守ろうとする動きが、民間企業主導という形で芽吹きつつある。初めは個社単位の小さな一歩かもしれないが、やがて産地の中で大きなうねりとなり、さらに他の産地にも広がっていくことを期待したい。

熱い思いと危機感を持った民間企業が自ら考え自ら行動する。尾州産地に本来の「地方創生」の姿を見た。

(注1)日本毛織物等工業組合連合会より。

(2017.9.21取材)

OKB総研 調査部 高木 誠



新たにイチテキとなって再出発した織物工場



西川知宏社長(中央)とイチテキ織物工場の技術者たち